

実践のまとめ（第6学年 道徳科）

胎内市立きのと小学校 教諭 塚野 聡仁

1 研究テーマ

主体的に自己の生き方を見つめ直し、自分なりの納得解を見出す道徳授業

2 研究テーマについて

(1) 研究テーマ設定の意図

特別の教科「道徳」の学習指導要領では、教材の登場人物の心情や行動を多面的・多角的に考え、登場人物について共感的に理解することが求められている。また、道徳的課題を自分事として捉え、自分の体験やそのときの感じ方と重ねながら、自己との関わりの中で考えることで、道徳的価値についての理解を深めることが大切であるとされている。

今年度、授業者が担当する学級は、第6学年32名（男子12名・女子20名）である。素直に感じたままのことを発言したり書いたりすることができる一方で、特定の児童の発言に流されてしまう様子も見られる。さらに、道徳的価値を高める方向に向かいにくい児童もいる。

現在までの授業者の指導では、児童の気持ちをしっかりと受け止め、聞くように心がけてきたが、授業の終盤では児童の考えの変容や深まりを促すことができず、最終的には教師側からの道徳的価値の押し付けになってしまっていた。また、話し合い活動をうまく組織することができず、ただの発表会になってしまう場面も多く見受けられた。

このような学習・指導実態を踏まえ、道徳的課題を自分事として捉え、主体的に自己の生き方を見つめ直し、道徳的価値に対する自分なりの納得解を見出すことができる姿を具現化するために、本研究主題を設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 道徳的課題を自分事として捉えるための発問の工夫

道徳的課題を自分事として捉え、自己の生き方を主体的に見つめ直すことができるようにするために、発問を工夫する。具体的には、主発問における主語を題材の登場人物ではなく、「あなた」とすることで当事者としての感覚を強調する。さらに、児童の考えの理由を問うことで、児童が自分の考えをより深めることができるようにする。これにより、児童は自分なりの納得解を見出すための参考として考えることができるようになる。

② 道徳的価値に対する自分なりの納得解を見出すための学習過程並びに発問の工夫

授業の前に事前アンケートを実施し、本時の教材で扱う内容項目に関するイメージを把握する。授業後には同様のアンケート（事後アンケート）を行い、事前と事後のアンケートを比較する。それにより、内容項目に対する児童の考えの変容や深まりを検証する。

内容項目について、直接的に問う発問を投げかけることで、道徳的価値の深まりを促進し、児童自身が考えの変容に気づきやすくなると考える。

(3) 研究テーマにかかわる評価

ワークシート等における記述や授業中の発言を通して評価する。自分の考えを具体的な場面や言葉で記述することができる姿を目指す。

3 指導計画

(1) 主題名

真の友情（内容項目B-10 友情、信頼）

(2) 教材名

「ロレンゾの友達」（教科書名 Gakken「新版 みんなの道徳6」）

(3) 主題設定の理由

① ねらいとする道徳的価値

学習指導要領によると、第5学年及び第6学年における友情、信頼とは、「友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め、異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと」とされている。友達は、互いの考え方などを交え、豊かに生きる上での大切な存在として、互いの成長とともにその影響力を拡大させていく重要な他者である。だからこそ、児童にとって友達は最も大切にしたい人間関係の一つであると言える。

よりよい友達関係を築くには、互いを認め合い、学習活動や学級生活の様々な場面を通して理解し合い、協力し助け合い、信頼感や友情を育んでいくことが求められる。

② 教材と児童

本学級の児童は、仲良く活動したり、互いに助け合ったり、声をかけたりしながら、協力して学校生活を送ることができている。しかし、人間関係に悩む児童もあり、さらなる信頼関係の構築が求められている。児童には、安心できる人間関係の居心地の良さや尊さを感じてもらいたい。それが、今後の人生における人との接し方のベースとなり、重要な役割を果たすからである。

本教材は、20年来の友達であるロレンゾが罪を犯したという警察の話を聞き、ロレンゾの無実を信じきれなくなった友達3人が、ロレンゾのことを考えて真剣に話し合う場面から始まる。後にロレンゾは無実であったことが分かり、本当の友情について考える話である。現実的な話ではないが、友達との関係に悩んでいる子どもたちにとって、友情について考えることができる適切な教材と言える。

本教材では、3人の登場人物が様々な考え、互いに異なる意見を述べ合っている。児童は、どれかの意見に賛成するかもしれないし、あるいは全く別の意見をもつかかもしれない。二者択一でないため、自分なりの考えを自由に思いつきやすいという良さがある。そして、学級内で多種多様な意見を交流させることで、真の友情とは何かについて考えを深めることができる。3人がどうすればよかったのかを考えながら、相互に信頼することにより、本当の友情が育まれることに気付かせたい。そして、信頼できる関係を築こうとする態度を育てていきたいと考える。

(4) 他の教科、領域との関連について

	教科・領域	道徳科	教育活動
1 学期	特別活動（学級活動） ・協力して全校をリードしよう。（4～7月）		運動会（5月）
			「きのとわくわくなかよし オリエンテーリング」（6月）
2 学期	特別活動（学級活動） ・学級レベルアップ作戦（11月） ・友達いっぱいチャレンジワールドを成功させよう。（11月）	「友達だからこそ なやむこと」（9月） B-10 友情、信頼	友達いっぱいチャレンジワールド（児童会祭り）（11月）
		「ロレンゾの友達」 （10月） B-10 友情、信頼	いじめ見逃しゼロスクール集会（11月）

3 学 期	特別活動（学級活動） ・ 6 年生に感謝する会につ いて（2 月）		6 年生に感謝する会（2 月）
	特別活動（学級活動） ・ 卒業プロジェクト （1～3 月）		卒業式（3 月）

(5) 本時のねらい

多様な考え方に触れ、議論することを通して、互いに信頼し高め合いながら友情を深めようとする態度と、本当の友達ならどうするかについての判断力を育てる。

(6) 本時の展開（令和 6 年10月29日実施）

	□学習活動	○主な発問 ・ 予想される児童（生徒）の反応	◇留意点 ☆評価
導 入 5 分	□資料を読み、内容を 押さえる。	○今日は友情と信頼がテーマの 学習です。資料の内容を一緒 に確認していきましょう。	◇資料の概要を押さえる ために、児童とやり取り しながら、必要な情 報を板書する。
展 開 ① 5 分	本当の友達って、どんな友達？？		
	□登場人物の行動を振 り返る。 □3 人の行動の共通点 を問う。	アンドレ：お金を持たせて、黙 って逃がす。 サバイコ：自首を進める。本人 が納得しなかったら逃がす。 ニコライ：自首を進める。納得 したら付き添う。納得しなかっ たら、警察に知らせる。 ○3 人の共通点は何だと思いま すか？ ・ 3 人ともロレンゾのためを思 って行動していることです。	◇事前アンケートの結果 を抜粋して紹介する。 （文章とワードクラウ ド） ◇自分の考えをより明確 にもてるように、登場 人物 3 人の行動を確認 する。
展 開 ② 10 分	□自分ならどうするか 考える。 （その後ペアトーク）	○罪を犯したかもしれないロレ ンゾに対して、「あなた」なら どうしますか？ [事実を確認する意見] ・ もし罪を犯していたら、自首 をすすめる。 ・ 本人がいないところで、うわ さをするのはよくないから、 真実を聞く。 ・ そもそも罪を犯したと決め付 けるのはよくないと思う。 [悪いことは悪いと言う] ・ 悪いことをしたのなら、反省 すべきだと思う。反省を促す	◇利己的な理由なのか、 友達のことを考えた理 由なのかを判断するた めに、その行動を選択 した理由もワークシー トに書くよう助言す る。 ☆1：ワークシート記述

		のも本当の友情である。よって、すぐに警察に知らせる。 〔ロレンゾを信じる〕 ・もしロレンゾが友達から疑われたことを知ったら、傷つくから。 ・信じて、無実を証明する。 ・本当の友達だったら、信じることができる。 〔警察に任せる〕 ・無実かどうか分からないから警察に任せる。 ・かくまったら、自分も罪を問われるかもしれないから警察に引き渡す。	◇児童の考えやその理由がより具体的に伝わるようにするために、児童に質問させる。 ◇その他の理由も取り上げる。
展開 ③ 12分	☐ 物語の続きを知る。 ☐ 3人の気持ちを考える。	○実は、この物語には続きがあります。(最後まで読む。) ○かしの木の下で話し合ったことをロレンゾに伝えなかったのはなぜでしょうか？ ・疑われていたと思わせてしまうから。 ・関係が崩れ、気まずいから。	
終末 13分	☐ 真の友情とはどのようなものであるかについて考えを深める。 (班⇒個人⇒発表) ☐ まとめ・振り返り	○本当の友達って、どんな友達ですか？ ・過ちを犯していたとしても、最大限支え合える関係。 ・思ったことは言ったほうがいい。(傷つかない程度に) ・本音を言える、何でも話せる。 ・疑ったり、ケンカしたりするけど、一緒にいると楽しくなれる家族とは違う存在。	◇多種多様な議論を収束させ、本時における新しい価値観・新しい視点を獲得させるために、共通点や重要なキーワードに着目させ、真の友情について考えを深めさせる。 ☆2：ワークシート記述 ◇意図的指名3名

(7) 本時の評価

① 評価の視点

友達の話をよく聞いたり、友達のことを考えて行動したりすることが、友情や信頼関係の構築につながると気付くことができたか。(☆1・2)

② 評価の方法

ワークシートへの記述(☆1・2)

☆1：友達のことを考えて、自分なりに相応しい考えを記述している。

☆2：学習したことを踏まえて、改めて自分なりの真の友情(友達)について考えを深め、記述している。

4 実践を振り返って

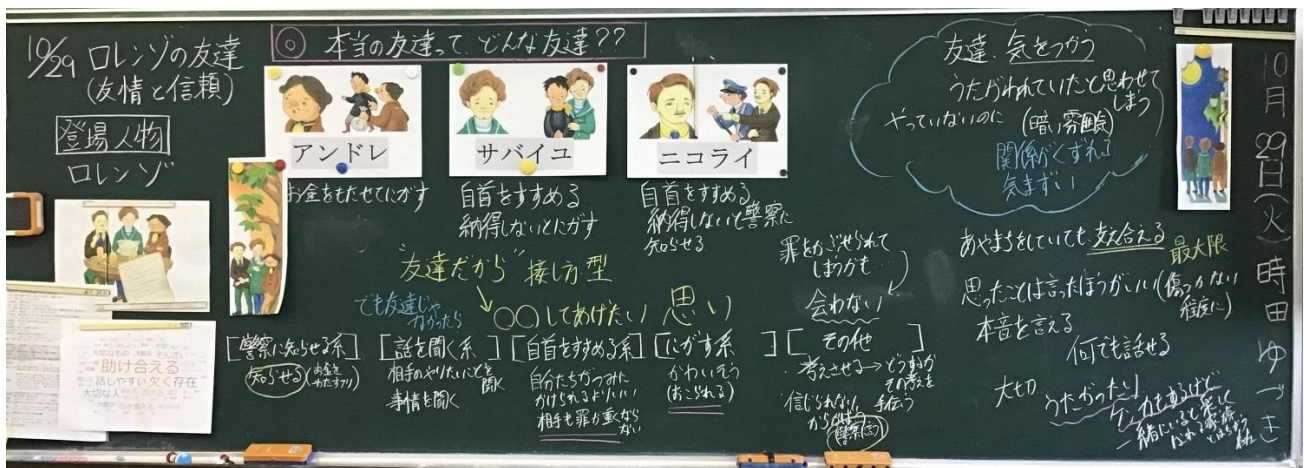
(1) 授業の実際（指導の実際）

① 道徳的課題を自分事として捉えるための発問の工夫

「罪を犯したかもしれないロレンゾに対して、『あなた』ならどうしますか?」と問うた。児童からは、「警察に知らせる」「話を聞く」「自首をすすめる」「逃がす」等の多様な意見が出された。(表1・写真等参照)この発問の前に、3人の共通点を問い、「友達だから〇〇してあげたい」という思いが共通していることを学級全体で確認していたので、児童から出された意見も概ねロレンゾのことを第一に考えたものとなっていた。中には自分本位の意見もあったが、学級全体で共有することで、相手のために思った行動が友情の望ましいあり方であると共通理解することができ、少なからず児童の意識の変容が見られた。

表1 主語を「あなた」として問うた発問に対する児童の考え

児童 A	まずは事情をしっかりと聞き、本当にやっていないのかどうかを確認する。もしやっていたら、自首をすすめ、自首に付き添う。やっていなかったら、警察に対して、無実を証明する。
児童 B	ロレンゾの思いを後悔がないようにしっかりと聞き、今後どうしていきたいのかを話し合う。そして、その考えを全力で支える。(応援する。)
児童 C	自首をすすめる。しっかりと罪を償い、また帰ってきてほしい。



② 道徳的価値に対する自分なりの納得解を見出すための学習過程ならびに発問の工夫

授業の導入場面では、事前アンケートを紹介し、「本当の友達」とはどのような友達なのかについて学級全体で共有した。事前アンケートの結果は、テキストマイニングによって解析し、ワードクラウド形式で示したものと、記述式の回答を一覧表にしたものの両方を提示した。また、授業の終盤には内容項目についての発問（「本当の友達とはどんな友達ですか？」）を行い、それについてワークシートへ記述させ、これを事後アンケートとして扱った。その結果を、ワードクラウドで図1に示す。

授業では班での話し合いを通じて、「本当の友達」について共に考えた上で、各自の考えをワークシートに記述させた。他の友達の多様な意見に触れる機会を設けたことで、個人の考えに広がりや深まりが生まれ、事前アンケート時よりも記述量が2倍近くに増えていた。授業後半には、挙手した児童を中心に指名し、学級全体で共有する場を設けることができた。

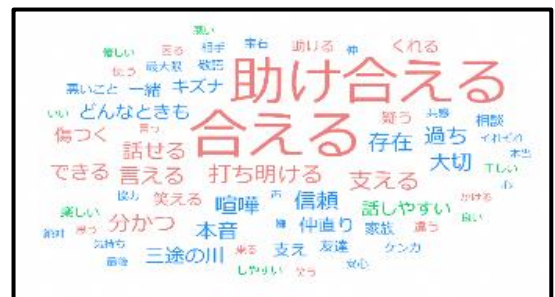


図1 事後アンケートのワードクラウドの結果

(2) 研究テーマに関わる評価

本実践では、研究テーマに関わって2つの手立てを講じているが、それらは有機的に結び付き、相互に関連している。そのため、ここではそれらを1つの評価として論じる。

まずアンケートの事前・事後を比較すると、以下の表2のように、児童の意見に多様性が見られるようになり、「友情・友達」についての考え方がより深まり、広がったことが分かる。

表2 事後アンケート「本当の友達とはどんな友達ですか？」に対する回答抜粋

児童 A	過ちを犯していたとしても、支え合える存在。最後まで信頼できる存在。
児童 B	気をつかったり、つかわれたりせずに、話ができる人。自分の気持ちに共感してくれる人。
児童 C	相手も自分も大切にできて、どんな時も助け合えて、絶対に壊れないのが、本当の友達。
児童 D	お互いの気持ちを理解し合える、分かり合える存在。
児童 E	本音が言い合える関係。悪いことをしっかりと指摘できる関係。

また、事前・事後アンケートのテキストマイニングを、量的・質的の両面から比較した結果、以下に示す表3の結果が得られた。

表3 事前事後アンケートの量的・質的比較

	事前アンケート	事後アンケート
量的	単語のみが多数・記述量が少ない 抽象度の高い画一的な単語が目立つ	文章での記述が多い・記述量が多い 具体的な文脈に位置づく単語が目立つ
質的	「頼れる」等の自分が友達からしてもらうことが中心の単語 自分の行動については記述がない場合が多い	「〇〇し合う」に代表される、友達と互いに良い影響を与え合う単語が中心 相手に求めるだけでなく、自分がどうしてあげられるかを考慮した単語が目立つ

表3から、量的には記述量が2倍以上に増加したことに加えて、より具体的で内容の深い文章が記述されるようになったことが分かる。事前アンケートでは、「大切」「親友」など、抽象的かつ画一的な言葉が多く見られたが、事後アンケートでは、より具体的な文脈に基づいた多種多様な動詞・名詞・形容詞が記述されていた。また、質的な変化として、事前アンケートでは「自分から友達へ」といった一方的な表現が多かったのに対し、事後アンケートでは「助け合える」「〇〇し合える」といった、相互作用を意識した表現が増加していることが確認された。

これらの変化は、授業を通してロレンゾに対する自分なりの行動を考えたり、本当の友達について学級全体で話し合ったり、他の児童の意見に触れたりしたことによる成果であると考えられる。一連の授業構成が、事後アンケートにおける量的・質的な変容を生み出したことを踏まえると、本実践は道徳的価値についての理解を深めることができたと判断できる。

(3) 今後の課題

学級の一人一人が、価値項目に対して大切にしていることが異なっている。この多様性をどのように引き出し、それをどう広げ深めていくかを慎重に検討しながら授業を構成していくことが今後の課題である。題材の登場人物の行動や価値観を受け止めるとともに、その行動の背景や理由を考察する中で、価値項目に対する児童の考え方を深めたり広げたりする機会を提供する必要がある。その際、登場人物に投影された自己の価値観を振り返り、見つめ直す過程が重要である。さらに、学級全体で学ぶことで他者の行動や価値観に触れることができるのは、児童にとって大変貴重な経験となる。今後は、他者の考えに納得した上でそれを取り入れたり、自分の考えを再構築したりするプロセスを重視し、価値項目の大切さに気付ける授業を目指したい。また、児童が自身の価値観の広がりや深まりを実感できるような学びの場を提供するために、日々の研鑽を続けていきたい。

<参考・引用文献>

文部科学省、『小学校学習指導要領解説 特別教科 道徳編』. 廣済堂あかつき株式会社. 2017